

平成23年7月18日(月曜日)

## 陸前高田市災害レポート②

福岡市立こども病院・感染症センター 高橋 宗康  
(派遣先：岩手県立高田病院)

私の職場を紹介いたします。岩手県立高田病院は、もともと50床の陸前高田市における中核病院でした。震災にて職員が数名死亡し、建物は水没全壊し、施設は津波が引いた後に再度使用できる状態ではありませんでした。また、次の津波も起こり得るため、4階建ての旧病院は放棄し、現在は、市街地から高台に登った所にある「米崎コミュニケーションセンター」という施設を臨時で使用しています。とは言っても、この施設は地域公民館のような施設で、おおよそ病院の構造ではありません。私たちはこの一つの平家屋を工夫し、診療を行っています。

まず、一番広い、10m×20m程の部屋に、医局、検査、薬局、事務が同居しています。薬局は、市街地の開業薬局が流失したため、高田病院の薬局と開業薬局が共同で調剤を行います。検査は、簡単な血算 生化学 血液ガスを行うことができ、簡単な機器は揃えられています。それ以外の細菌、脳波、トレッドミル、特殊検査、病理はできません。レントゲンは、畳2畳のスペースに、ポータブルレントゲンが1台あり、胸部レントゲンから整形外科領域の獣の骨に渡るすべての単純レントゲン撮影を行っています。診療室は、ひとつの部屋をカーテンで分けて3、4のブースを作り、1ブース約1畳のスペースとなります。内科4、整形 1、小児科1ブースとなっています。受付、薬の引渡し、会計は玄関から入った待合室と同じスペースに机を並べただけの形態です。これに訪問診療や訪問リハビリを行っています。精神科医が週一回来院し、PTSDや不安神経症の患者を紹介しています。看護師は、採血検査部門、外来担当、訪問診療チームに分かれています。小児科では、検診や予防接種を小児科医師1人でを行っています。



医局 事務 薬局がある  
大きい広間



受付 手前では薬剤師  
が処方の説明



採血室

一日の平均来院患者は140人で、私が診療する患者は30人程度となっています。多くが慢性疾患（高血圧 糖尿病）の定期フォローですが、私にとってはどの患者も初顔合わせであり、初診患者という状況になります。旧カルテは流失し、震災直後は服薬内容から既往歴まで一から患者から聴取する状態だったとのことです。内科に関しては、7月15日まで秋田大学と三重県から定期的に医師、看護師、事務を派遣していたため、なんとか診療ができていました。しかし、7月15日で両チームが撤退しました。

震災後から徐々に医療班が撤退し、今週からは私、整形外科医（大阪から）と元々の高田病院の医師となります。絶対的な医師不足で今後の診療体制は暗澹としています。潜在的な需要はありますが、掘り起こすほどできず今でさえ手がまわらないのです。ただ、看護師などコメディカルが震災後でも精一杯元気にやってくれることが救いとなっています。



小児科診察室  
（私のブースは  
この半分です）

現在は、入院ベッドがないため、精密検査や、救急入院患者は、大船渡市にある大船渡病院（車で30分）へ紹介しています。夜間は、救急患者は受け入れていませんが、患者が来た場合に備え、医師、看護師1人ずつが当直をしています。私は7月13日に当直を行い、ワイドハイターを誤飲した79歳の男性を診療しました。自殺ではなく、間違っただけということなので、簡単な救急処置（牛乳を飲ませる）を行い、救急車で大船渡病院へ搬送させました。

診療所における私の印象としては、エアコンが無いため暑い！ということですので。私のブースは32度となり、事務兼医局は、機材が集中するため、37度を示しました。そして、患者の数が多く、ソフト面がアナログであること（紙カルテ+処方 検査オーダーもカーボン紙を当ててすべて手書き）、医療資源に限りがあること、加えて患者の心理面への心配りで毎日極度に疲弊します。例えば、先程のワイドハイターを誤飲した患者の場合です。私が、「搬送先の病院で、重症であるから、奥さん以外の家族（息子さんなど）へ直ぐに連絡をとってください」と伝えたところ、「息子は津波で流された…」と言われ、二の句が告げませんでした。岩手は「通常ニ非ズ」が、現在進行形なのです。

おそらく震災の影響と思われるかもしれませんが、ハエが多く発生し、保健所は感染症の発生に目を光らせています。7月25日にプレハブの仮設診療所へ移動となる予定ですが、アナログ、医師不足である点は変化がないと考えます。状況が劇的に好転しないことは確実に考えています。